

# マムルーク朝期の非著名知識人のライフコース ——アフマド・アイニーに関する事例研究——

中 町 信 孝

は じ め に

I 先行研究と史料

II 生 涯

III 知 識 の 獲 得

IV 知 識 の 行 使

V 生 業 と 家 族

お わ り に

は じ め に

歴史的イスラーム世界の都市社会において、知の担い手であるウラマー（‘ulamā’, 単数は‘ālim）は、支配エリートと民衆との仲介者として位置づけられ、彼らに関する研究にはすでに豊富な蓄積がある<sup>(1)</sup>。中でも個々のウラマーのライフコースを扱った事例研究は多く、近年は新史料の発見・開拓にともなうて、さらにその裾野を広げている<sup>(2)</sup>。しかし、従来の研究で対象とされたウラマーとは、いずれも年代記・人名辞典等で頻繁に名前の挙がるようなウラ

(1) ウラマーを単なる社会・経済的な階層や身分制度上の1カテゴリーにとらえることは避けるべきだが、彼らが「知の担い手」としての社会的な役割を共有する集団であるという点については、多くの研究者が一致している。ウラマーに関する研究動向としては、Humphreys 1991; 三浦 1995があるが、これら以降にもChamberlain 1994などの重要な研究が出ており、欧文ではMarin 2010、和文では湯川 2009; 谷口 2011など最新のウラマー研究を参照せねばならない。

(2) たとえば近藤 1999: 85は昨今のウラマー研究を概観し、ウラマー全体の傾向を見ようとする研究と、特定の個人・家系の活動を具体的に検証することで当時のウラマーの実態を明らかにしようとする研究とがあることを指摘している。本稿のアプローチは、後者の事例研究的アプローチに属する。

マー、いわば著名人ばかりであり、その一方で叙述史料に名前が残ることのないウラマーは、必然的に研究対象から漏れていた。このことは、従来の研究がもっぱら一部のエリート・ウラマーばかりに注目し、地位や名声の低い非エリートのウラマーは等閑視されていたと言うことを意味する。従来の事例研究を統合することで得られるウラマー像とは著名ウラマーのそれであり、必ずしもウラマーという社会集団全体を十分に代表しうるものとは言えないのである。

ところで筆者はこれまで、マムルーク朝（1250-1517年）後期に活躍した著名な歴史家バドルッディーン・マフムード・アイニー Badr al-Dīn Maḥmūd b. Aḥmad b. Mūsā al-Aynī（1361-1451年）の著作を対象とした文献学的調査を行ってきたが、彼による年代記編纂プロセスを仔細に検討すると、そこに大きな役割を果たした彼の実弟シハーブッディーン・アフマド・アイニー Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Aḥmad b. Mūsā al-Aynī なる人物が浮かび上がる<sup>(3)</sup>。アフマドが書写したマフムード・アイニーの年代記の手稿本<sup>(4)</sup>は多数に上り、中にはアフマドが要約したバージョンも見られる。それらの手稿本は、奥書においてアフマド自らによる署名が付されていることから、そうと知れるのである。

しかし、一方で同時代に著された種々の史料を見ると、年代記史料にも人名辞典にも、アフマドの名前を載せるものは皆無である。奇妙なことに、実兄であるマフムードによって書かれた年代記『世の人々の歴史における真珠の首飾り』*Iqd al-Jumān fī Ta'rikh Ahl al-Zamān*』（以下『真珠』と略）にも、アフマ

(3) 中町 2004: 142-143; 中町 2005: 033-034; 中町 2006: 50-51, 53を参照。

(4) 本稿では英語の *manuscript* に対応する語として「手稿本」の語を用いる。通常日本の歴史研究の用法では、「写本」という語をこれにあてることが多く、「著者自筆の本」であれ「それを基にして転写された本」であれどちらも「写本」と呼ぶ〔築島 1986〕。しかし、そもそも「写本」という語には「本を手書きで書き写すこと。また、そうした本」〔『大辞林』1165〕との意味があり、この語義に従うならば、「著者自筆の本」を「写本」に含めることはできない。本稿では「自筆本」と「転写本」の双方を取り上げるため、従来の歴史研究で用いられてきた意味で「写本」の語を用いると、誤解を生じかねない。したがって本稿では、「写本」の語は「写した本」という意味に限定して用い、これに自筆本をも加えた手書きの本全般については「手稿本」という語を用いる。なお、イスラーム史やヨーロッパ史における「写本」の概念が日本におけるそれとは異なるという指摘は、佐藤 2008; 岡崎 2008参照。

ドに関する記事は見あたらない。つまり、このアフマドは当時の知識人社会においては、ほとんど無名の人物であったというに等しい。我々がこのアフマドに関する情報を得られるのは、ひとえに彼自身が執筆・書写した手稿本が残存するという特殊な条件による。それらの手稿本の本文中ないしは欄外や奥書において彼が記した書き込みの記述を集めることによってのみ、彼のライフコースを再構成することが可能となるのである。

本稿は、あまり著名ではないウラマーの1人であったアフマド・アイニーの生涯を、彼自身による記述から、可能な限り復元する試みである。彼のライフコースを、著名人であった兄マフムード<sup>(5)</sup>、およびその他の著名ウラマーと比較することにより、従来のウラマー研究では扱われなかった非著名ウラマーという視点を補い、「ウラマー」という社会集団のとらえ方自体を見直すことができると思う。なお本稿では、2人のアイニーについて混乱を避けるため、兄のバドルッディーン・マフムード・アイニーを「マフムード」、弟のシハーブッディーン・アフマド・アイニーを「アフマド」と呼ぶこととする。

## I 先行研究と史料

### 1 先行研究

管見の限り、アフマドについて言及した研究の中で最も古いのは、フランスの東洋学者カトルメールによるものである。彼はマクリーズィーの年代記 *Kitāb al-Sulūk* の仏訳の付録としてマフムードの生涯を紹介する1章を設けているが、そこで後述するパリ手稿本を用い、その書写者であるアフマドにもわずかながら言及している [Quatremère 1837-45: 1/1/219-228]。彼は、この手稿本の作成にマフムードとアフマドの兄弟が関わっており、文中に両者の一人称記述が混在していることを認識しているが、両者の記述を時に誤って理解している<sup>(6)</sup>。その後フランス国立図書館所蔵のアラビア語手稿本カタログを編纂した

(5) マフムード・アイニーの学問的キャリアについては、中町 2009を参照。

(6) 本章第3節「史料中の自分語り表現の注意点」を参照。一例を挙げれば、後出の【表4】7の記事について、Quatremère 1837: 1/1/221ではこの“akhi”を「我

スラヌも、同手稿本の書写者としてアフマドの名を挙げている [Slane 1883: 291]。

イスタンブールの各図書館が収蔵するアラビア語手稿本を調査したカーエンは、『時代と世の人々の描写における流星の歴史と輝く月 *Al-Ta'riḫ al-Shihābī wa'l-Qamar al-Munīr fī Awṣāf Ahl al-'Aṣr wa-l-Zamān*』(以下『流星』と略)なる年代記の手稿本がトプカプサライ付属図書館およびファーティフ図書館(現在はスレイマニエ図書館にあり)に所蔵されており、それらがすべてアフマド・アイニーの自筆本であることを指摘した [Cahen 1936: 354]。しかし、カーエンはこれらの手稿本の奥書のみからアフマドの情報を得ているため、アフマドの人物像については踏み込んだ分析はしていない。その後、トプカプサライ所蔵のアラビア語手稿本カタログを作成したカラタイも、『流星』の著者としてアフマドの名を挙げているが、それ以上の情報は無い [Karatay 1966: 385-386]。

## 2 史 料

### アフマドが書写・執筆した手稿本

アフマドが書写・執筆した手稿本としては、【表1】のとおり12点が確認される<sup>(7)</sup>。

これら12点のうち、2～5は兄マフムードの小年代記『時代の人々の描写における満月の歴史 *Ta'riḫ al-Badr fī Awṣāf Ahl al-'Aṣr*』(以下『満月』と略)の写本であり、7～11は『流星』の手稿本である<sup>(8)</sup>。後述する6の手稿本の一部を除けば、これらが同一人物の筆跡によるものであることは確かであり、う

が兄(弟)」と解釈し、この時著者すなわちマフムードと同名の兄弟が死亡したとするが、実際には *akhī* (アヒー) とは、当時アナトリア地方各地に見られた若者集団を統率するリーダーに閑せられた称号のことであり、ここにおいてカトルメールは語りの主体についても死亡した人物についても誤っている。アヒーについては『大旅行記』3/441-446参照。

(7) ただし、ここに挙げた手稿本はいずれも歴史に関連する著作のみであるが、それ以外にアフマドが法学等の他の学問ジャンルに関わる書を書写・執筆していた可能性もある。

(8) 【表1】の1の手稿本も『満月』に含めて良いと考えられる。

表 1 アフマド・アイニーによる手稿本一覧

|    | 所蔵機関    | 所蔵番号             | 収載内容      | 摺筆年月日                | 署名 | 詩 1 | 詩 2 | 詩 3 |
|----|---------|------------------|-----------|----------------------|----|-----|-----|-----|
| 1  | スレイマニエ  | Es'ad 2095       | 地誌        |                      |    |     |     |     |
| 2  | スレイマニエ  | Es'ad 2346       | 11-17(AH) | 809.06.30/1406.12.11 | ○  | ○   | ○   | ○   |
| 3  | セリム・アー  | Selim Ağa 838    | 289-487   | 810.02.01/1407.07.07 | ○  | ○   | ○   |     |
| 4  | セリム・アー  | Selim Ağa 839    | 487-624   | 812.09.10/1410.01.16 | ○  |     | ○   | ○   |
| 5  | スレイマニエ  | Süleymaniye 830  | 717-799   | 813.02.01/1410.06.04 | ○  |     | ○   |     |
| 6  | フランス国立  | Arabe 1544       | 799-832   |                      |    |     |     |     |
| 7  | トブカプサライ | Ahmet III 2952/2 | 1-14      | 833.07.03/1430.03.28 | ○  |     | ○   | ○   |
| 8  | トブカプサライ | Ahmet III 2952/3 | 14-64     | 833.10.11/1430.07.02 | ○  | ○   | ○   |     |
| 9  | スレイマニエ  | Fatih 4222       | 64-229    | 834.02.04/1430.10.22 | ○  | ○   | ○   |     |
| 10 | スレイマニエ  | Fatih 4223       | 230-426   | 834.06.20/1431.03.05 | ○  | ○   | ○   |     |
| 11 | トブカプサライ | Ahmet III 2952/6 | 427-571   |                      | ○  |     |     |     |
| 12 | セリム・アー  | Selim Ağa 837    | 715-818   |                      |    |     | ○   |     |

ち 9 点には奥書にアフマド・アイニーの署名が見られる。また、うち 9 点の末尾には、本文と同じ筆跡で、それぞれ 1～2 行からなる 3 首の詩句が引用されている。その 3 首とは以下のとおりである。

詩句 1：

書き手は滅び行くほかなし　されどその両手の書きしものは常世に残る  
されば汝はその手で書くにしかず　審判の日に見て汝を喜ばせるものを  
(wa-mā min kātibin 'illā sa-yublā

wa-yabqa'd-dahru mā katabat yadā-hū

fa-lā taktub bi-kaffi-ka ghayra shay'in

yasurru-ka fi'l-qiyāmati 'in tarā-hū)

詩句 2：

文字は書き手の後まで残り　文字の書き手は土の下

(al-khaṭṭu yabqā zamānan ba'da kātibi-hī

wa-kātibu'l-khaṭṭi taḥta't-turābi madfūnū)

詩句 3：

深き穴底にても保証されて目覚めんことを　現世から（埋葬時に着る）衣  
の他に持てる物はなくとも

おおその慈悲が信徒に広がりし者よ 汝の信徒の中でも悪事をなすのが私  
だ

(aṣḥaḥtu fī qa'ri ḥufratin murtahinan

lā amliku min dunyā bī ghayra'l-kafanā

yā man wasa'at raḥmatu-hu 'ibāda-hu

min ba'di 'ibādi-ka'l-musi'ina 'anā)

これらの詩句はおそらく、すでに知られていた詩句の引用と思われるが、具体的な出典は不明である<sup>(9)</sup>。ともあれ以上の特徴から、これら12点の手稿本すべてがアフマドの筆によるものであると見て間違いないであろう。

さて、これら12点の手稿本の中でも、アフマドのキャリアを知るために重要となるのは、彼と同時代の情報を載せる以下の3点である。

① Süleymaniye Kütüphanesi, MS Süleymaniye 830 (スレイマニエ手稿本, 略称SU) 【表1】5

イスタンブルのスレイマニエ図書館所蔵。『満月』の第9巻にあたる手稿本であり、ヒジュラ暦717年から799年までの情報を収載する。最終葉の奥書には、アフマドの名と、813年2月1日(1410年6月4日<sup>(10)</sup>)との擱筆年月日が記されている。原著者であるマフムードによる直筆本は残っていない<sup>(11)</sup>。

② Selim Ağa Kütüphanesi, MS Selim Ağa 837 (セリム・アー手稿本, 略称SA) 【表1】12

イスタンブルのセリム・アー図書館所蔵。カタログでは『満月』とされているが、その内容は『満月』の要約版とおぼしい。拙稿ではこれを『流星』の一

(9) これらの詩句、特に詩句1, 2に現れている「書き手 (kātib)」としての来世観、死生観は興味深いものがあるが、本稿では扱わない。

(10) 本稿で年月日を併記する際は、先にヒジュラ暦、スラッシュの後もしくは括弧内に西暦の順で記す。ヒジュラ暦を示す際には月名のカタカナ表記(ムハッラム月、サファル月……)ではなく、算用数字による表記(1月, 2月……)を用いる。

(11) 中町 2005: 033-034参照。なお、これとはほぼ同様の内容を持つ手稿本に、英国図書館所蔵の『満月』手稿本 British Library, MS Add. 22366 (英国手稿本, 略称BL)があるが、後の注(5)で見ると、この手稿本ではアフマドによる書き込みがほとんど見られないため、本稿では補助的にしか用いない。

表2 パリ手稿本における筆跡

|      | 葉 数                | 収載年代(AH)          |
|------|--------------------|-------------------|
| 筆跡 1 | 1b-102b, 117b-167b | 799-814, 820-827年 |
| 筆跡 2 | 103a-117a          | 815-819年          |
| 筆跡 3 | 168a-186b          | 828年～             |

部であると推測したが、冒頭部分を欠くためタイトルが無く、書写年代も不明であるため、あくまでも推測にとどまる。ヒジュラ暦715年から818年の情報を含んでいる〔中町 2006: 50-51〕。

③ Bibliothèque Nationale de France, MS Arabe 1544 (パリ手稿本, 略称 BN) 【表1】 6

フランス国立図書館所蔵。186葉からなるこの手稿本は、ヒジュラ暦799年から832年までの内容を含むが、書写年は不明。カタログではマフムードの著者である『真珠』の手稿本とされるが、その内容は『真珠』本文と比べると大きく異なる<sup>(12)</sup>。この手稿本は【表2】のように、異なる3人の筆跡で書かれている。

先述のとおり、スラヌのカタログは筆跡1の書き手を、その記述内容から弟アフマドであるとしている。この筆跡が上述のスレイマニエ手稿本と一致することからも、この書き手がアフマドであることは間違いがないだろう。筆跡2の書き手については、スラヌは何も述べていないが、他の『真珠』自筆本と筆跡が一致することから、マフムードの筆であることは明らかである<sup>(13)</sup>。また、筆跡3については、fol. 169a 欄外に本文と同じ筆跡で「これは学院の住人, Bahā' al-Dīn Aḥmad b. 'Alī の手による」との書き込みがあり、これがこの部分の書写者の名前であると考えられる<sup>(14)</sup>。

著者と弟を含む複数の人物の筆になるという特徴から、この手稿本がなんら

(12) この収載年代をカバーする『真珠』刊本として、『*Iqd/Qarmūṭ*』がある。

(13) 『真珠』自筆本については中町 2006: 43の表1を参照。

(14) おそらくこの人物は、マフムードが建造したバドリーヤ学院 (al-Madrassa al-Badriyya) に寄宿する学生の1人であろうが、他の同時代史料から確認することはできなかった。同学院については注33参照。

かの作品の「草稿 (muswadda)」であることがうかがえる。タイトル頁の文字が不鮮明ではあるが、冒頭以下大半を占めるアフマドによる書写部分は、上述のスレイマニエ手稿本と連続しており、このバリ手稿本もまた『満月』の一部をなすものであると考え得る。なお、筆跡1の部分以外には、アフマドに関する情報は見られない。

### 『流星』のワクフ付き手稿本【表1】 7～11

カーエンとカラタイの挙げる『流星』手稿本5点は、いずれもアフマドの自筆である。これらにはアフマドの同時代の記述は収載されていないが、それぞれのタイトル頁に本文と同じ筆跡によるワクフ設定文が付されており、アフマドの後半生に関する重要な情報を提供している。

### 『真珠』の該当部分

その他、『真珠』の同時代部分にはマフムードによる一人称の情報が散見されるが、アフマドは『真珠』の作成には関わっておらず、必然的にアフマドによる一人称情報はこれには収載されていない。また先に述べたとおり、マフムードは弟アフマドに関する個人情報を何一つ記していないため、アフマドの生涯に直接関係する情報を得ることはできない。

## 3 史料中の自分語り表現の注意点

兄マフムードの著作である『満月』のテキスト中において、書写者にすぎないアフマドが自らの体験に基づく記述を書き込む際に、いったいどのような自己言及をしているのだろうか。スレイマニエ、パリ、セリム・アー各手稿本の記述をみていこう。

まずはスレイマニエ手稿本の中の、ヒジュラ暦764年の条にあるアフマドの誕生を記した下りを見てみよう。

弱きしもべ ('abd al-ḡa'īf), 至高なる神を必要とする者 (al-muḥtāj ilā allāh ta'ālā), この歴史書の書き手 (kātib hādihā al-ta'rikh) が曰く、私は、我が実の兄 (akhī wa-shaqīqī) にしてこの歴史書の編纂者 (jāmi') が9月に生ま

れたのと同じく、この年、すなわち764年の9月（1363年6,7月）に生まれた（wulidtu）。我が兄の誕生は762（1361）年、護られたるインターブの町の Kaykan 街区（darb）において、同じ家においてである [SU: 75b]。

ここでは、マフムードのことを「実の兄」と呼ぶ一方、自らのことは「弱きしもべ」「至高なる神を必要とする者」との謙譲表現とともに「この歴史書の書き手」と呼び、一人称の記述がそれに続いている。しかし、この記述を同手稿本のヒジュラ暦762年の条におけるマフムードの誕生の記述と比べてみよう。

弱きしもべ、至高なる神を必要とする者、この歴史書の編纂者（jāmi'）が曰く、私は、この年、すなわち762年の9月26日（1361年7月30日）に生まれた [SU: 72b; BL: 64b]。

誕生年からして、ここでの1人称の語りがマフムードを指すものであることは間違いがない。しかし、「弱きしもべ」「至高なる神を必要とする者」との表現は先ほどのアフマドを指す表現と共通しており、唯一「編纂者」との箇所が異なるのみである。すなわち、この箇所ではマフムードとアフマド双方の語りが混在しており、両者は「編纂者」と「書き手」という、この手稿本にとっての役割についての呼称の違いによって弁別されうるのである<sup>(15)</sup>。また別の箇所では、「著者（mu'allif）」という呼び名でマフムードを指す例もある。時に「書き手」としてマフムードを指している場合も2例あるが、どちらもその直後に「著者（mu'allif）」との呼称が続いている [SU: 194a, 198a; BL: 181b]。

次に、パリ手稿本を見てみよう。先に見たカトルメールは、パリ手稿本の文中に現れる「著者（l'auteur, mu'allif）」との表現はマフムードのことであり、「書き手（l'écrivain, kātib）」および「編集者（le rédacteur, musaṭṭir）」は弟の

(15) またこれら2例では、「編纂者」マフムードによる自らの誕生の記述は、スレイマニエ手稿本と英国手稿本の双方で確認できるが、「書き手」アフマドによるそれは、英国手稿本の中には見られない。このことから、「編纂者」による情報のみを含み「書き手」の情報を含まない英国手稿本は、『満月』のより古い形を伝える写本であると考えられる。そして「書き手」による独自情報は、アフマドによる一連の『満月』写本群が書写された際に、本文中に挿入されたものと見て良いだろう。すなわち『満月』は、マフムードによる原著執筆の段階と、アフマドによる1人称情報の加筆という、2つの段階を経て現在に伝わっているのである。

表3 各手稿本でのアイニー兄弟の呼称

|                 | 手稿本<br>略称 | kātib<br>書き手 | jāmi'<br>編纂者 | mu'allif<br>著者 | musatṭir<br>著者 | ṣāhib<br>作者 | mukhtaṣir<br>要約者 |
|-----------------|-----------|--------------|--------------|----------------|----------------|-------------|------------------|
| アフマドに<br>対する呼称  | SU        | ○            |              |                |                |             |                  |
|                 | BN        | ○            |              |                | ○              |             |                  |
|                 | SA        | ○            |              |                |                |             | ○                |
| マフムードに<br>対する呼称 | SU        | ○            | ○            | ○              |                |             |                  |
|                 | BN        |              |              | ○              | ○              | ○           |                  |
|                 | SA        |              | ○            | ○              | ○              | ○           |                  |

アフマドのことであるとする [Quatremère 1837-45: 1/1/226]。前2者についてはスレイマニエ手稿本とも一致するが、残る「編集者」と訳されている musatṭir の語については再検討を要する。実際にパリ手稿本中で musatṭir の語が使われている用例は少なく、アフマドの筆跡による部分ではわずか2例のみである。1つめの用例として801年の条には、「この歴史書の musatṭir であり ṣāhib であるマフムード・アイニーに名誉の外衣を授け、カイロの市場監督官職に就けた」[BN: 23b]とあり、ここでは「著者」としてのマフムードを指す語として用いられていることは疑いがない<sup>(16)</sup>。2つめの用例は810年の条に、「それ(アミール Manṭūq の首級)はダマスカス城塞の門のところに掲げられたが、弱きしもべであるこの歴史書の musatṭir はこの目で城塞の門に吊されているのを見た」[BN: 82b]との欄外書き込みがある。ここでの musatṭir は、後述の通りこの時点でダマスカスに居を構えていたアフマドを指すものとも考え得るが、マフムードである可能性も排除できず、これだけの記述からは決めがたい<sup>(17)</sup>。いずれにせよ、カトルメールが musatṭir の語をアフマドを指

(16) ただしこの箇所ではマフムードの称号(ラカブ)を Jamāl al-Dīn としており、通常の彼の称号である Badr al-Dīn とは異なっている。その理由は不明である。

(17) なお、アフマド以外による musatṭir の用例としては、同手稿本においてはマフムードの筆跡の部分に2箇所 [BN: 116a-b]、筆跡3の部分に4箇所 [BN: 173b, 174b, 175b, 178b] あり、そのいずれもが明らかに兄マフムードのことを指している。また、別稿 [中町 2009: 53] で指摘したように、マフムードの別著作『真珠』においては、musatṭir の語は「著者」であるマフムードを指す語として頻繁に用いられている。

すとしたのは必ずしも正確ではない。なお、パリ手稿本ではマフムードを指す語として「作者 (ṣāhib)」を用いる例もいくつか見られる。

セリム・アー手稿本の場合、おおむね上記2手稿本に準じるが、1箇所だけアフマドを「要約者 (mukhtaṣir)」と呼ぶ箇所がある点が注目される [SA: 47b]。

以上に見た呼称の違いをまとめると、【表3】のようになる<sup>(18)</sup>。これらの呼称が、3手稿本での自分語りの表現の主体を判定するための手がかりとなる。

## Ⅱ 生 涯

### 1 本 名 と 生 年

『流星』各手稿本の冒頭にあるワクフ文書に拠れば、アフマドの本名は、Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Aḥmad b. Mūsā al-ʿAyntābī al-Ḥanafīであり、クンヤは Abū al-Qāsim, すなわち「カースィムの父」とある<sup>(19)</sup>。また他の箇所では、al-Badrī および al-Taʾrīkhī とのニスバを付されている [SA: 220a, 227b, 232b, 242a, 249b]。前者は「満月 (badr)」という単語の派生語であり、兄マフムードの称号 Badr al-Dīn にちなむものと考えられる。後者は「歴史 (taʾrīkh)」を意味する単語からの派生語であろう。彼がなぜこのようなニスバを称していたのか正確なことは分らないが、彼が当時、周囲から「歴史」の知識に関係する者として認識されていたことを示す証拠と言えよう。

アフマドの生年については、すでにヒジュラ暦764年の条にある記述を確認した。アフマドは、兄であるマフムードと生年をわずか2年違えただけで、出生地も家族構成も共有していることになる。

### 2 居住地の変遷

アフマドが郷里アインターブを離れたことを明確に示す証拠は、カイロにおいてマフムードが師事していたサイラーミー al-Sayrāmī の死亡記事の中にあ

(18) ただし、パリ手稿本に関してはアフマド書写部分のみを対象とする。

(19) アフマドの息子カースィムについては後述。

る次のような記述である。

本書の書き手アフマドは、本書の編纂者 (jāmi‘) である兄マフムードの訪問のためカイロに来たが、その時この長老 (サイラーミー) の病のためにアインターブからアネモネ<sup>(20)</sup>水を持参し、彼はそれを飲んで快癒した。(中略) 私は長老のもとへも訪れ彼からドゥアー (祈願) を授った [SA: 111b]。

この出来事は、マフムードがカイロに滞在する788/1386年から、サイラーミーが没する790/1388年の間のことと考えられる。この時アフマドは彼からドゥアーを授かったと語っているのみであり、具体的な知識の授受があったかどうか、つまり彼らが師弟関係を結んでいたかどうかについては確認できない。

これ以降のアフマドの情報を集めると、彼がいくつかの都市の間を頻繁に移動していることがわかる。彼の足跡は【表4】のようにまとめられる。

アフマドの主な滞在地・居住地は郷里のアインターブの他、アレppo、メッカ、ダマスカス、カイロである。このうちメッカに関しては、信仰的義務としての大巡礼による滞在である。

郷里のアインターブについて、アフマドが、「この歴史書の書き手 (中略) は、アインターブに住んでいた。我が家のそばの『乙女の泉 (‘ayn al-banāt)』のところにある『果樹園の街区 (ḥārat al-basātin)』に浴場を建て、『薔薇の湯 (ḥammām al-ward)』と名付けた」[BN: 37a] と述べているように、彼はアインターブに自邸を有しており、さらには浴場も持っていた。しかし、これらの不動産はティムール軍の侵入により、破壊されてしまったとある。

アレppoについては、792/1390年のアミールの Mintāsh<sup>(21)</sup>によるアインターブ攻撃、および803/1400年のティムール侵攻の難を逃れて一時的に居を移した

(20) shaqā‘iq al-nu mān. *Lexicon*: 1578 は、「赤い色のアネモネ」との語義を載せる。「アネモネ水」なるものに関しては未詳だが、アネモネは地中海沿岸に自生するイチリンソウ科の植物であり、ここでは薬の一種として用いられていることがうかがえる。

(21) Sayf al-Dīn Tamurbughā Mintāsh al-Afdālī (d. 795/1393). もとアシュラフ・シャアバーン (在位1363-1377年) のマムルークであり、バルクーク治世 (1382-1389, 1390-1399年) にマラティヤ総督となったが反乱を起こし、バルクークを一時退位へと追い込んだ。 *Manhal*: 4/94-99.

表4 アフマドの地理的移動

|    | 年 月 日                | 場 所    | アフマドによる記述内容            | 史 料                |
|----|----------------------|--------|------------------------|--------------------|
| 1  | 788/1386以降           | カイロ    | サイラーミーと面会              | SA: 111b           |
| 2  | 790/1388             | アインターブ | 師にクルアーン朗誦を披露           | SA: 205a           |
| 3  | 791.02初/1389.01      | ヒムス    | 「2度目のエジプト旅行」へ向かう       | SA: 108a           |
| 4  | 792/1389-90          | アインターブ | 「兄とともに城塞にいた」           | SA: 133a           |
| 5  |                      | アレppo  | 「その後…アレppoへ行き、そこに住んだ」  |                    |
| 6  | 796/1394             | メッカ    | 妻とともにメッカ巡礼             | SU: 210a; SA: 149b |
| 7  | 800/1397-98          | アインターブ | Akhī Maḥmūd の葬儀に参列     | BN: 12b; SA: 155a  |
| 8  | 801.12/1399.08       | カイロ    | 「その当時、兄の元にいた」          | SA: 162b           |
| 9  | 802.11初/1400.06      | アインターブ | アインターブに滞在中             | BN: 33b; SA: 170a  |
| 10 | 803/1400             | アインターブ | ティムール軍から避難             | BN: 43a; SA: 181a  |
| 11 |                      | カイロ    | 兄の元へ行く                 |                    |
| 12 | 810.01.18/1407.06.24 | ダマスカス  | アミール Jakam の首級を目撃      | SA: 220b           |
| 13 | 810/1407.08          | ダマスカス  | アミール Manṭūq の処刑を目撃     | SA: 221a           |
| 14 | 814.01.14/1411.05.08 | カイロ    | 息子カーシムの葬儀              | BN: 94a; SA: 230b  |
| 15 | 814.04.05/1411.07.27 | ダマスカス  | ダマスカスへ戻る               | SA: 232b           |
| 16 | 814.09.01/1411.12.16 | カイロ    | バドリーヤ学院落成に立ち会う         | BN: 99a            |
| 17 | 815/1412.13          | カイロ    | カリフの遠征軍を目撃             | SA: 242a           |
| 18 | 817/1414.15          | ダマスカス  | カイロへの往路、アミール Nawrūz 目撃 | SA: 249b           |
| 19 | 820.08.16/1417.09.27 | ダマスカス  | 隣人の葬儀に参列（おそらくアフマドが）    | BN: 128a           |
| 20 | 820.10.06/1417.11.15 | ダマスカス  | 自邸に隣人招き説教              | BN: 128a           |
| 21 | 822.08.27/1419.09.19 | ダマスカス  | オスマン朝の使者目撃             | BN: 135b           |
| 22 | 822.09/1419.09-10    | ダマスカス  | Muṣṭafā Bāk の首級目撃      | BN: 135a           |
| 23 | 823/1420             | ダマスカス  | 兄とともにカイロへ              | BN: 143b           |
| 24 | 823/1420以降           | カイロ    | その後家族も呼び寄せ             | BN: 143b           |

ものと考えられるが、具体的な描写はみられない。しかし、ティムール侵攻の際には「アインターブとアレppoにあった私の財産はすべて略奪された」[BN: 37a]とあり、アレppoにも何らかの財を有していたことがうかがえる。

803/1400年にカイロのマフムードの元へ行くとあるが（【表4】11）、その後のアフマドの足跡はダマスカスとカイロとの間を頻繁に移動していることが伺

える。ここで【表1】の手稿本リスト2～5を見ると、809/1406年から813/1410年にかけて少なくとも4点の手稿本を書写しているが、それらの奥付でアフマドは自らを「カイロ在住の (al-Qāhirī al-maskan)」とのニスバを付して名乗っている。このことから、この時期のアフマドはカイロに居住していたと見られ、それは本文中でしばしば「その頃私はカイロにいた (kuntu fī al-Qāhira fī hādhihi al-ayyām)」と記していることとも合致する。

その後アフマドは、814/1411年にダマスカスに移り住んだと見られる【表4】15]。823/1420年の条には「私はダマスカスの Ḥammām al-Ward 街区<sup>22)</sup>に住んでいた」[BN: 143b]とあり、また820/1417年にはダマスカスにある自邸のことを「私の大きな家 (baytī al-kabīr)」[BN: 128a]と呼んでいるのである。なお、セリム・アー手稿本は正確な書写年代は不明であるが、本文中で自らに「ダマスカス居住の (al-Dimashqī al-mawṭin)」[SA: 48b]とのニスバを付している。この手稿本はヒジュラ暦818年、つまり1415-1416年までの記述を収載しており、これをアフマドが記したのは、814/1411年のダマスカス移住以降と考えて良いだろう。

さて再び【表1】を見るならば、7～10の手稿本、すなわち『流星』手稿本は833/1430年から834/1431年までに記されている。これらの奥書にも「カイロ在住の」とのニスバが付されており、アフマドが再びカイロに居を定めていたことが分かる。しかし、彼がダマスカスからカイロに移住した明確な時期や理由は、定かではない。823/1420年の条には、以下のような記述がある。

兄がカラマーン領 (bilād Qaramān) からやって来たとき、私も兄とともにカイロへと旅だった。(中略) カイロに入っても私には職 (waṣīfa) がなく、再び私の家族のいるダマスカスへと戻った。しばらく私は留まり、そのあとダマスカスから家族を伴って引っ越し、カイロに住み、アシュラフィーヤ (al-Ashrafiyya) にスーフイーとして留まった [BN: 143b]。

マムルーク朝の使者としてアナトリア地方に派遣された兄マフムードが、コ

<sup>22)</sup> このダマスカスでの街区名は、アフマドがかつてアインターブに建てた浴場の名と同じであるが、そのことについてアフマドはこれ以上のことを語っていない。

ニアを發ち帰途に就いたのが823年7月25日/1420年8月4日なので、両者がダマスカスで会ったのはその直後と考えられる。しかし、いったんカイロからダマスカスに戻ったアフマドが、家族を伴って再度カイロに到来した時期については、ここには記述がない。ところで、アフマドが家族とともに滞在した「アシュラフィーヤ」とは、どの施設であろうか。この時期に存在した「アシュラフィーヤ」とは、時のスルターン、アシュラフ・バルスバーイ（在位1422-1438年）の建てた学院のことである<sup>23)</sup>。バルスバーイがこの学院を建造したのは827/1424年のことであり、おそらくアフマドは、建造されて間もないアシュラフィーヤ学院に家族を伴って移り住んだのであろう<sup>24)</sup>。ダッラージュの校訂したバルスバーイのワクフ設定文書にはスーフィーと同義に用いられる「学生（ṭalaba）」に関する規定があり、ハナフィー派法学を学ぶ25名の学生に毎月300ディルハムを支給すると定められている [Darrāġ 1963: 2-3]。このときアフマドが「スーフィー」として滞在したとあるのは、この「学生」の資格で手当を受け取りつつ滞在していたことを意味しよう。

### 3 没 年

カイロ移住以降、アフマドが自らのことを書き記した情報はなくなり、先に見た『流星』手稿本の冒頭に付されたワクフ文書を除いては、彼のカイロ生活を物語る史料は存在しない。カーエンはアフマドの没年を834/1430年としているが [Cahen 1936: 354]、これはこれらの手稿本の撰筆年を指しているにすぎず、アフマドの没年とみなすことはできない。

さて先に述べたとおり、兄であるマフムードは弟アフマドについていかなる個人情報をも記していない。その一方でマフムードは、自らの祖父、父、妻、息子たち、娘たちについては言及しており<sup>25)</sup>、それだけに、アフマドに関する

23) バルスバーイ以前に「アシュラフ」を名乗ったマムルーク朝前期スルターン、アシュラフ・シャアバーンも、1375年に学院を建造していたが、1411年に取り壊され、この時点ではムアイヤド・シャイフ（在位1412-1421年）の病院（bīmārī-stān）として改築されていた [Warner 2005: 136]。

24) バルスバーイ学院の建造年については Warner 2005: 118 (no.175) 参照。

25) 祖父 Mūsā, 父 Aḥmad については中町 2009: 57-60を参照。息子 ‘Abd al-‘Azīz

記述がないことは奇妙である。しかし、マフムードの血縁者たちに対する言及はもっぱら彼らの死亡記事においてであり、当然のことながら彼らはみなマフムードの存命中、より厳密には『真珠』の収載年代中に世を去っている。このように考えると、アフマドについての記述が『真珠』中に見あたらないのは、彼が『真珠』の記述の途絶える850/1446、47年以降に没したためであると考え得る。ただし、アフマドが先に亡くなっていたにもかかわらず、何らかの理由からマフムードがアフマドの死亡記事を書き残さなかったとの可能性を排除することもできない。そのためここではアフマドの没年を、彼が最後の『流星』手稿本を撰筆した834/1431年より後であるとだけ述べておく。

### Ⅲ 知識の獲得

以上、アフマドのライフコースを概観したが、彼をウラマーという社会集団の一員として分析するためには、彼がどのようにしてウラマーたる知識を獲得し、それをどのように行使していたかを確認する必要があるだろう。ここではまず、アフマドによる知識の獲得に焦点を当てる。

#### 1 知識の獲得(1): 教育

兄マフムードについては、彼が執筆した年代記『満月』と『真珠』にある死亡記事（人名録）から、彼がどのような人物に師事してきたかを知ることが可能であった〔中町 2009: 60-68〕。一方のアフマドについては、そのような詳細な情報は集めようがないが、それでも自ら書写・執筆した手稿本には、彼が直接面識のあったウラマーの情報が散見される。【表5】に、アフマドによる記

---

(818/1415没): *ʿIqd/Qarmūt*: 1/254. 息子 *ʿAbd al-Raḥmān* (822/1419年没): *ʿIqd/Qarmūt*: 1/368; BN: 140b-141a. 息子 *ʿAlī* (833/1430年), 娘 *Fāṭima* (833/1430年没), 息子 *Ibrāhīm* (833/1430年没), 息子 *Aḥmad* (833/1430年没): *ʿIqd/Qarmūt*: 2/397. 娘 *Zaynab* (849/1445年没): *ʿIqd/Qarmūt*: 2/649. なおマフムードにはこれ以外に, *Zayn al-Dīn ʿAbd al-Raḥīm* (864/1460年没) と名乗る息子がおり, 彼がただ一人, マフムードの没後まで生き延びた息子であったが, マフムードは彼の記録も一切残していない。 *Nujūm*: 16/215 参照。

表5 アフマドと面識のあるウラマー

|   | 人 名 (没年)                                 | 出会った都市 | 史 料                |
|---|------------------------------------------|--------|--------------------|
| 1 | Aḥmad b. Khalīl al-ʿAyntābī              | アインターブ | BN: 64a; SA: 205a  |
| 2 | Mikāʾil b. Ḥasan b. Isrāʾīl, Zayn al-Dīn | アインターブ | SU: 216a; SA: 151b |
| 3 | ʿĪsā b. al-Khāṣṣ al-Sarmārī              | アインターブ | SU: 138b; SA: 101b |
| 4 | Jibrīl b. Sālih al-Baghdādī              | アインターブ | SU: 201a           |
| 5 | Aḥmad b. Muḥammad al-Sayrāmī             | カイロ    | SA: 107b           |
| 6 | Abū Bakr al-Bajāwī al-Maghribī           | カイロ    | BN: 51a; SA: 147a  |

述から彼と面識のあったことが確認できるウラマーのリストをあげる。

これらのウラマーのほとんどが、兄マフムードの師匠一覧に名前の挙げられている人物である点に、まずは注目したい<sup>(26)</sup>。兄と2歳違いで生まれ、家庭環境等をほぼ共有していたと考えられるアフマドであれば、そのキャリアの早い段階で接し得たウラマーが兄の師匠リストと似通った顔ぶれになることは当然であろう。それでは、実際にアフマドがこれらのウラマーから学んだ事柄は、マフムードが学んだ事柄と比べて何か違いがあるであろうか。

たとえば(1) Aḥmad b. Khalīl al-ʿAyntābīについては、

彼は我が師でもあり、私は聖クルアーンを彼のもとで読み、始めから終わりまで彼に披露した (ʿaraḍtu)。アインターブの町において、790 (1388) 年のことである [SA: 205a]。

とある。アフマドの生年から計算すると、彼がクルアーンの暗誦を披露したのは26歳ということになる。兄のマフムードについては9歳でクルアーン暗誦を披露したことが明らかになっており、両者のクルアーン披露年齢の違いから、アフマドの学修の遅さを指摘することはできよう<sup>(27)</sup>。

また【表5】(2)、(4)の人物に関してアフマドは「私にとっての師でもあ

(26) (1)～(5)の人物はそれぞれ、中町 2009: 61の表における5、6、8、10、19の人物に相当する。

(27) マフムードのクルアーン暗誦年齢については、中町 2009: 62参照。なおここで披露されたのはクルアーンの暗誦のみであるが、マムルーク朝後期に広く行われた学問修行の過程における披露 (ʿarḍ) の慣行については、苗村 2010を参照。

った」と述べ、彼らから学んだ書名を記している。その内容は以下のとおりである。

アフマドが(2)から学んだ書物

A-1: Ibn al-Sā'ātī, *Majma' al-Baḥrayn* [EI2: 3/921; GAL: GI/382, SI/658]

A-2: 'Umar b. Muḥammad al-Khabbāzī, *al-Mughnī fī Uṣūl al-Fiqh* (の一部) [GAL: GI/382, SI/657]

アフマドが(4)から学んだ書物

A-3: al-Qudūrī, *al-Mukhtaṣar* [EI2: 5/345-; GAL: GI/174, SI/295, 951]

A-4: Ibn al-Sā'ātī, *Majma' al-Baḥrayn* (A-1に同じ)

A-5: Abū al-Layth al-Samarqandī, *Tanbīh al-Ghāfilīna* [EI2: 1/137; GAL: SI/347]

このリストの内、A-1とA-4は同一であるため、アフマドがこれらの師から学んだ書は4点となる。

他方、マフムードがこれらの師から学んだ書名についても記録が残っており、兄弟がそれぞれの師から学んだ内容を比較することも可能である。マフムードが(2)の師から学んだのは、A-2と同一の書、Abū al-Barakāt al-Nasafī, *al-Manẓūma fī al-Khilāfāt* [EI2: 7/969; GAL: GI/196, SI/263]を含む3点、(4)から学んだのは、A-1(A-4)と同一の書、Al-Zamakhsharī, *al-Kashshāf* [EI2: 11/432-435; GAL: GI/289, SI/507], 'Ubayd Allāh b. Mas'ūd b. Tāj al-Sharī'a, *Tanqīḥ al-Uṣūl* [GAL: GII/214, SII/300]を含む6点で、計9点であった。マフムードが学んだ書については一部不明なものもあるものの、書物の点数だけを単純に比べても、マフムードの優位が伺える。

学んだ書の内容をさらに詳しく見るならば、まずアフマドの学んだ書には、A-3クドゥーリーの『提要』のような法学の初歩的テキストが含まれている。またアフマドが(2)から学んだA-1 *Majma' al-Baḥrayn* は、この『提要』と、マフムードが同じく(2)から学んだ al-Nasafī, *al-Manẓūma fī al-Khilāfāt* とを併せて編集した法学書である。この他、法源学に関するA-2の書をアフマドが「一部 (ba'd)」のみしか聴講していないのに対して、マフムードは同じ師

からすべて学んでいる。こうした2人の師との関係から比較するならば、アフマドはマフムードに比して、学んでいる書の数が少ないばかりか、総じて初歩的テキストのみを学んでいる傾向が見て取れるのである。

残る3名の人物については、アフマドが師事したかどうかについて確かなことを知る記述はない。たとえば(3)の死亡録には、彼の説教(wa‘ẓ)中にハトがそれを聴きに來たという奇跡譚が記されているが[SU: 141b]、この逸話から分かるのは、アフマドが彼の説教を聞いていたことのみであり、両者の間で特定のテキストを用いた知識の授受が行われていたかどうかは定かではない。(5)のサイラーミーについては先に見たとおり、「ドゥアーを授かった」だけであり、また(6)には「挨拶をした(sallamtu ‘alay-hi)」とあるのみである。

知識の授受が行われたことをもっとも明確に示す指標があるとすれば、それは「イジャーザ(ijāza)」が与えられたか否かということになろう。しかし、以上6名の人物からはアフマドがイジャーザを授かったとの記述はない。アフマドが、自身が授かったイジャーザについて語るのは、兄マフムードからイジャーザを受けたという次の記述においてのみである。

この歴史書の著者である我が兄マフムード(al-qāḍī Badr al-Dīn Maḥmūd)はまた(ayḍan)、この歴史書の書き手である、至高なる神を必要とする弱きしもベアフマド(Aḥmad b. Aḥmad al-Ḥanafī al-‘Ayntābī)に、確かな道を望む者たち(rāghibīn ilā ṭarīq al-sadād)への指導と導き(al-talqīn wa’-irshād)についてのイジャーザを私が求めたあとで、私に指導してくれた(laqqana-nī)。そして彼は、それについて先述のイスナードによってイジャーザを私に与え(ajāza-nī)、敬虔の道に沿って振る舞い真実の民に従い欲望を抑えることを望む者へそれを指導することを、私に許した(adhana lī)。彼はまたこの年[791/1389年]カイロで私に唱名(dhikr)を指導し、外衣(khirqa)を着せてくれた[BN: 51a]。

文中に「また」との副詞があるのは、兄マフムードが師であるナースイルッディーン・アーガー Nāṣir al-Dīn Āghā からイジャーザを授かったことを受けての表現である。ナースイルッディーン・アーガーはマフムードにとっての「スーフイーのタリーカ(ṭarīqat al-ṣūfiyya)」, すなわちタサウウフの師であり、

この直前の記述では、マフムードが彼から唱名の指導を受けたこと、第4代カリフのアリーを経て預言者ムハンマドにまで遡る外衣を授かっていることが記されている〔中町 2009: 67〕。そしてこの記述では、アフマドが兄からイジャーズを受けることによって、アフマド自身も上記の系譜に連なることになり、他者に指導する資格を得たことになる。

以上のように、アフマド青年期の勉学に関する記述からは、彼が聖典や法学に関する知識を数名のウラマーから学んでおり、ある程度はウラマーとしての教育を受けていることがうかがえる。またこれらの師に加えて兄マフムードからもタサウウフのイジャーズを授かっている。しかし兄マフムードの学問遍歴と比べるとアフマドのそれは、師の数は少なく、習得年齢は遅く、学修内容も初歩的なものに留まっている。むしろ、アフマドの足跡がすべて記録されているわけではないため、実際にはより多くの師について学んでいた可能性もあるが、彼のウラマーとしての勉学経験を兄と比較するならば、小規模なものであったことは間違いないだろう。

## 2 知識の獲得(2): 歴史書の書写と執筆

以上のような師たちとの接触の他に、アフマドは兄マフムードの書物を書写することによっても知識を獲得していたと考えられる。

まず、アフマドはその生涯にマフムードの著した年代記『満月』の手稿本を少なくとも4冊書写しており、その内容はアフマドによる一人称記述の書き込みが挿入されていることを除けば原本との異同はない。それらの書写年代は、809/1406年から813/1410年にかけてであったが、この期間アフマドは上で見たとおり、ダマスカスとカイロを頻繁に往来しつつもカイロに居を構えていた。この時期のアフマドには、兄マフムードが執筆した『満月』の原本を間近で参照する機会があったのであろう。あるいは著者であるマフムードの口述（読みあげ）を聞いて書写したとも考え得る。

もう一つ、アフマドは自著として『流星』という年代記を執筆しているが、別稿で明らかにしたとおり、この書はマフムードの著作である『満月』を要約したものである〔中町 2006: 50-51〕。実際に、『流星』の一部をなすと見られる

セリム・アー手稿本の中では、マフムードを「著者」「編集者」と呼び、アフマド自身には「書き手」との呼称が与えられている点は、他の『満月』手稿本と共通する特徴であった。つまり、『流星』のテキストにおいても、マフムードのことを「著者」と見なしている点では『満月』と変わらないと言えるのである。しかし、ここでマフムードとアフマドのいずれが『流星』の真の著者であるのかを問うことには意味はない。重要なのは、アフマドが『満月』のテキストとその要約版を自らの手で書いたということである。その行為を通じてアフマドは、天地創造に始まるイスラーム世界の歴史の知識を習得した、あるいは、そのように認められたのである。

#### Ⅳ 知識の行使

ウラマーは自らの持つ資本である様々な知識を行使することで生活の糧を得ていた。そのもっとも一般的な手段が、チェンバレンの言う「手当付きの職」(manṣāb, waḏīfa) に就くことである。実際、当時のウラマーの職業は、君主の顧問や裁判官から病院の管理者やクルアーン学校の教師まで多岐にわたっていた [Chamberlain 1994: 50, 92-100; 佐藤 2004: 191-192]。アフマドの場合、上に見たとおりウラマーとしてのなにがしかの知識を獲得していたと言えるが、その知識をどのように社会に還元しそこからどのような利益を得ていたであろうか。以下、アフマドによる知識の行使の側面を見ていきたい。

##### 1 「手当付きの職」について

当時の「手当付きの職」には、政府から賃金の支払われる官職と、ワクフから手当が出る役職との2とおりが想定されよう。しかしアフマドに関して言えば、カイロ移住時にアシュラフィーヤのスーフィー、すなわち学生の資格で手当を受け取っていたことを除けば、彼が何らかの職に就いていたことを示す記述は一切ない。反対に、彼が職に就いていなかったことに関する記述のみが見られる。

たとえば810/1407年アフマドは、反乱に敗れて死亡したアミールのジャカム

Jakam<sup>28)</sup>について、次のように記している。

私たちはジャカムのために、たいへん悲しんだ。なぜなら〔彼は〕我が友であり、私と彼との間には友情があったからだ。神よ、彼を慈しみ給え。彼はかつて私に、もし彼が安全にカイロに来られたなら、私の求めるどんな職（wazifa）でも与えてくれると約束していた。しかし、神はそれを叶えなかったのである [SA: 220b]。

そもそもジャカムは兄マフムードとの結びつきの深いアミールであり、801/1399年にマフムードが市場監督官（muhtasib）の職を得たのはジャカムによる斡旋があったためであるとも言われている [Daw': 10/132]。ここでアフマドはジャカムに対し、職を与えてくれるパトロンとしての役割を期待していたといえよう。しかしジャカムの敗死によって、アフマドの期待がかなうことはなくなった。

アフマドが「職」について語っているのはもう一箇所、先に見た、823/1420年にマフムードとともにカイロに赴いた際、「カイロに入っても私には職がなく」[BN: 143b]との記述がそれである。

先述のとおり、同時代の年代記・人名辞典は、アフマドに関する情報を一切伝えていないため、彼がどのような職に就いていたかを知る客観的な手がかりはない。むしろ、他者による情報が皆無であるという事実そのものが、彼がいかなる職にも就いていなかったことを示しているとも言える。

## 2 知識の行使(1): 説教師としての活動

職に就く以外にアフマドは、いかなる方法でその知識を社会的に行使していたのであろうか。アフマドによる知の社会的実践のあり方を示す記述が820/1417年の条にある。以下に引用しよう。

私の大きな家を道場（zāwiya）として、高貴な知識（al-'ilm al-sharīf）を聞

<sup>28)</sup> Sayf al-Dīn Jakam min 'Awḍ al-Zāhirī (d. 809/1406). スルターン・バルクークのmam-luk出身。その子のスルターン・ファラジュ（在位1399-1405, 1405-1412年）に反旗を翻し、809/1406年、アレppoにおいてスルターンを僭称したが、同年に戦死した。Manhal: 4/313-324.

かせるために友人や同郷人を集め、彼らに歴史 (al-tawārīkh) や征服譚 (al-futūḥāt wa'l-ghazawāt) や預言者伝 (al-aḥādīth al-nabawiyya) を、神のため、信徒への忠告として語った (akhbartu)。その晩、私は彼らへ施しとして自分の財産から、胡椒飯と甘い飯、ザクロの粒、そして最後は西瓜をふるまった (wa-'amiltu la-hum fī hādhihi al-layla al-madhkūra bi'l-faḡīrī min māli...)。彼らは心ゆくまで食し、中には料理や飯を家に持ち帰る者までいた。私は彼らのために3ヶ月間説教をし (wa'aẓtu)、その後夏が来ると、彼らは夜には眠くて座っていられなくなり、私が読誦している (aqra'a) のに彼らは眠ってろくに聞いていなかったが、私は放っておいた [BN: 128a]。

彼が自邸を「道場」としたという表現からは、タサウウフとの関わりが推測される。先述の通り、アフマドは兄マフムードからズィクルのイジャーザを得ており、ゆえにここでの表現は自邸をタサウウフの知識を授ける場として開放したものと解釈できよう。そして実際にアフマドが行ったのは、近隣の住民に対して「高貴な知識」を語って聞かせることであり、そのことを彼自ら「説教した」と述べているのである。つまり、ここでの記述はアフマドの「説教師 (wā'iz)」としての活動の一端を記したものと言える<sup>(29)</sup>。また、ここでアフマドが語った「高貴な知識」とは「歴史や征服譚や預言者伝」という、いずれも「歴史」の範疇に含まれる知識であった。こういった知識をアフマドはおそらく、兄マフムードの著した年代記『満月』を书写することによって、我がものとしていたのであろう。彼が書写・執筆した手稿本は、そもそもこのような説教の場で読み上げることを意図して作成されたとも考え得る。いずれにせよ、ここでは「歴史を語る」という行為が、そのままタサウウフ的な宗教実践と結びつけられている点は興味深い。

ただし、彼がこの説教によっては何の収入も得ておらず、反対に参加者に食

(29) ただしアフマドの説教師としてのあり方は、同時代に優れた説教師として広く認知されたクドゥスィーのような人物とは一線を画すべきであろう。クドゥスィーについては塚田 2009を参照のこと。また、特に説教とタサウウフとの関わりについては、Shohan 1993: 12-16を参照。

事をふるまっているという点は注目すべきである。ここで「施しとして」と訳したのは“bi'l-faqīri”という表現である。この表現の正確な意味は不明であるが<sup>(30)</sup>、ここでは人々に食事を振る舞う行為と結びつけて用いられており、救済的な意味合いを持つ表現であることが伺える。

### 3 知識の行使(2): 著書のワクフ設定

もう1つ、アフマドによる知の実践についての重要な史料となるのが、彼が要約・執筆した年代記『流星』の冒頭に付されたワクフ設定文書(waqfiyya)である。これは彼のカイロ移住後の状況を知るための唯一の史料であると同時に、彼の執筆の意図を知る重要な手がかりでもある。

このワクフ設定文書を検討する前に、まずはワクフ行為における本の扱い一般についてまとめておこう。そもそもマムルーク朝時代のワクフでは、土地や建物などの所有権の移動を停止(waqf)することで「ワクフ財」とし、その収益を「ワクフ対象」となるモスクやマドラサなど宗教・教育施設、あるいは病院や隊商宿など慈善・商業施設の運営に当てた。中でも宗教・教育施設がワクフ対象となる場合、そこには「書庫(khizānat al-kutub)」が付設されていることが多く、本はそれらの施設の付属物として扱われていた<sup>(31)</sup>。サイドは「ワクフとされた本」として、①本そのものにワクフ設定文書が付されているもの、②ワクフ設定文書の中にその(本の)範囲が示されているもの、③蔵書印としてワクフ設定文が付されているものの3種類を取りあげ、そのうち①の区分がもっとも一般的であったと述べる[Sayyid 1997: 2/427-28]。しかし、従来のワクフ文書を用いた研究では大規模施設を対象としたワクフ設定文書の中でわずかに本について触れられている例、すなわち②に当たる事象がもっぱら取り上げられてきており、本に対し単独のワクフ設定文書が付される①に該当するものは、サイドが同書中で挙げる事例を除いては、ほとんど取り上げられてこ

(30) *Supplément*: 2/280 はこの表現について用例は載せているものの、その意味は不明としている。

(31) ワクフ文書における、マドラサ等に付属する「書庫」については、Amīn 1980: 255; Sayyid 1997: 1/246-257 を参照。

なかったのである<sup>32)</sup>。

以下に訳出する『流星』第2巻冒頭に付された奥書は、アフマドが自らの手稿本に付したワクフ設定文書であり、サイイドのいう①の区分に相当する。なお、訳文中のローマ数字による番号は筆者が便宜的に付したものである。

I この巻のすべてを停止し固定し道に供し永遠とする (waqafa wa-ḥabbasa wa-sabbala wa-abbada)。これは『流星の歴史と輝く月云々 (*al-Ta'riḫh al-Shihābī wa'l-Qamar al-Munīr wa-mā ba'd-hu*)』の第2 [巻] であり、それは7巻をもって完成する。その著者にして書き手は、神を求めるしもべであるシハーブッディーン・アフマド (略) である。

II 4 法学派すべてからの、高貴なる知識を求める学生にして、学習 (muṭāla'a) の美点を備えた者が、読誦 (qirā'a) と学習と書写 (naskh) においてそれを活用すること。

III 護られたるカイロのアズハル・モスクにおいて、毎晩の日没の礼拝後と、朝の礼拝後に、モスクの中庭にて椅子に腰掛けてそれを読誦すること。金曜礼拝の後にもである。

IV また我が兄であり著名なる知識あるイマーム、大カーディーのバドルッディーン・アブー・ムハンマド・マフムード [・アイニー] の学院<sup>33)</sup>においては、金曜 (laylat al-jum'a) と月曜 (laylat al-ithnayn) における、朝の礼拝後と日没の礼拝後あるいは宵の最後の礼拝後に読誦すること。

V そして [この] 歴史書の読誦が終わった後には、[神の] 書の開示章を読誦し、その著者にして書き手である前述したシハーブッディーン・アフマドへのドゥアーをし、書物による報いを捧げること。

VI その設置場所 (maqarr) は、私の存命中は私の元とし、私の [没] 後には前述したアズハル・モスクの書庫の中とし、それについての監督 (al-

32) ただし、②の事例において大規模施設の付属物としてワクフとされた本にも、それぞれ個別にワクフ設定文書が付されていたこともあり得るので、①と②の区分は事象として対立するものではない。なお、上記の③の区分は主にオスマン朝時代に行われており、本研究とは関わない。

33) マフムードが建造したバドリーヤ学院 (al-Madrasa al-Badriyya) のこと。

Warner 2005: 104 (no.102) 参照。

nāzir) は我が妻である al-sitt al-muṣawwana al-Ḥājja Ḥalīm bint al-Ḥāj Sulaymān とし、彼女の後は前述したアズハル・モスクの監督に委ねるものとする。

VII 読誦あるいは書写のためにそれを求める者には、その学生が信仰ある人々のうちの善良な人物であるか、よく知られている場合には、それを禁じてはならないが、1巻だけを与えて、その巻を返してきた時に他の巻を取らせること。返してきた物はすべて、先述したアズハル・モスクの書庫に置き、シャイフの Sharaf al-Dīn ʿĪsā (中略) の読誦に送り、彼の後は他の法学者 (al-fuqahā) でそれに精通した者の [読誦に送ること]。

VIII 「遺言を聞いた後で変更する者があれば、罪はこれを変更する者にある。まことに神はよく聞き、よく知ったもうお方である<sup>34)</sup>。」

IX この著者である先述したシハーブッディーン・アフマドに対する証言は、預言者のヒジュラ暦834年3月中日(1430年12月1日)にカイロにて行われた [Shihābī: 1a]。

このワクフ設定文は、I に序文とワクフ財の説明およびワクフ設定者の名前、II～VII にワクフ対象とその条件およびワクフ財を管理する人員の説明、VIII～IX に証言日を含む末文が記載されており、通常のワクフ設定文書と比べるとやや簡略化された書き方になっていることが分かる<sup>35)</sup>。特に末文では日付とともにこのワクフについての証言が行われたことが記されるが、証人の名前などが一切省略されている。なおここに記された日付は、『流星』第2巻から第6巻までのすべての奥書において同一の日付となっている<sup>36)</sup>。

アフマドの設定したワクフ条件を、サイドが挙げる同時代のアラビア語手

<sup>34)</sup> 『コーラン』77 (『雌牛の章』181節)。

<sup>35)</sup> 五十嵐 2010: 199-242によると、通常のワクフ設定文書は、1. 序文、2. ワクフ設定者の名前、3. ワクフ財、4. 受益対象、5. 施設および財務の運営にあたるスタッフ、6. スタッフそれぞれの俸禄、7. 管財人、8. 設定者の子孫と親族、9. 賃貸契約、10. 禁止事項、11. 末文、から成り立っている。

<sup>36)</sup> この日付は『流星』第5巻にあたる手稿本 Fatih 4223の末尾に記された擱筆年月日より、3ヶ月ほど先んじている。【表1】10を参照。つまり、アフマドは手稿本を脱稿し終わる前に、これら一連のワクフ設定を行っていたことになる。

稿本に付されたワクフ設定文と比べてみたい。サイイドは、イブン・ハルドゥーン（1332-1406）ら著名な知識人の著作を含む18件の手稿本におけるワクフ設定文を紹介しており、さらに別の箇所では、マムルーク朝時代において蔵書数の多さで知られていたマフムーディーヤ学院（al-Madrasa al-Maḥmūdiyya）にワクフ設定された蔵書のワクフ設定文を紹介している [Sayyid 1997: 2/433-442, 1/254-255]。

サイイドの挙げたワクフのうち数点では、学生たちの「読誦と学習と書写」に役立てることが条件とされており、これは上記のアフマドのワクフのⅡにある表現と共通する。しかし、サイイドの挙げる事例の多くが、貸与期間の制限や保証金（rahn）の額についてなど、本の貸与条件について細かく指定しているのに対して<sup>(37)</sup>、アフマドのワクフでは、1巻ずつ貸与するというような曖昧な条件が課されているのみであって、貸与期限や保証金については何の記述もない（Ⅶ）。その一方、アフマドが特に「読誦」について詳しい条件を付している点は、他に例を見ない。アフマドのワクフでは、アズハル・モスクの中庭およびバドリーヤ学院というように読誦の場所が指定されており、さらに読誦する曜日・刻限まで指定されているのである（Ⅲ、Ⅳ）。

以上、限られたサンプルとの比較ではあるが、さしあたりの結論として以下のことが考えられる。当時、本のワクフは「読誦と学習と書写」という目的が条件として掲げられることが多く、『流星』もそのような条件が付されていたが、貸与に関する条件が曖昧であったのに比して、読誦に関する条件が極めて詳細であった。そこから、『流星』はおもに所定の学術施設内での「読誦」という使用を意図した書物であり、書写・複製によって広範に流布することはあまり意図されていなかったと言えるのではないだろうか<sup>(38)</sup>。またこのようなワ

(37) たとえば、「相応の保証金（bi-rahn wathīq）と引き替えてなければ持ち出さぬこと」、「貸し出しにおいては2ヶ月間を超えぬこと」などの文言がある。また、マフムーディーヤ学院では、「いかに保証金やその代わりとなるものと引き替えてあっても、それ（書物）やその一部をその学院から持ち出してはならない」という条件が課されていた。Sayyid 1997: 1/255 参照。

(38) 地域は異なるが、これをさらに岩武 1995: 292-302が訳出・分析するイルハン朝時代の『ラシード著作全集』に付されたワクフ条件と比較することもできる。

クフ条件によって、ワクフ監督とされているアフマド自身とその妻<sup>39)</sup>には、金銭的利益が一切見込まれないことにも注目したい (VI)。このワクフによってアフマドが得られる見返りとは、読誦後に定められた「ドゥアー」のみなのである (V)。

## V 生 業 と 家 族

以上のように、アフマドはウラマーとしての学修経験を積み重ね、イスラーム的知を獲得してきた。また彼は、そうして獲得した知を社会的に行使したが、それにより官職・役職に就くことも、金銭的な利益を得ることもほとんどなかった。そうすると、アフマドにとっての知は、いったい彼に何をもたらしただか、あるいはもたらさなかったのかが問題となろう。

本章ではアフマドが獲得した知が、彼にとって何を意味するものであったかを考察する。そのために、アフマドの実際の生計手段、家族戦略、息子の教育といった、文化再生産の側面に注目する。

### 1 アフマドの生計手段

アフマドは、カイロ移住後にアシュラフィーヤ学院の「スーフィー」となったことを除けば、ワクフからの手当は一切受けていない。それではアフマドは、どのような手段によって生計を立てていたのだろうか。

アフマド自身の記述のなかには、彼が何らかの商売・交易に携わっていたことを示す箇所がいくつかある。1つ目は、ヒジュラ暦802年の条において、「私はその頃、この歴史書の著者である我が兄に対して繋がりを保つ (ṣīlat al-raḥīm) ためと、いくぶんかの商売 (ba‘d al-tijāra) のために、カイロにいた」

---

『ラシード著作全集』のワクフ条件は、「写本作成指示書」との呼び名からもうかがえるとおり、著書の写本作成の手順について事細かに条件を指定しており、『流星』のワクフが「読誦」を重視しているのとは、きわめて対称的と言える。

<sup>39)</sup> アズハル・モスクの書庫にある本の監督としてアフマドの妻が設定されている点は、この時代の女性の地位を物語る材料として注目すべきであろう。

との箇所である。この時点でアフマドはアインターブに居住しつつカイロ等にも足を運んでいたことは確かだが、ここではその目的の一つが「商売」のためであると明記している。

2つ目は、803/1400年、ティムール軍の侵攻を逃れてカイロに來た際の記述に、次のようにある。

私はこの歴史書の著者である我が兄、カーディー・バドルッディーン・マフムードのためにカイロへ移り、カイロの布地市場 (sūq al-sharb<sup>(40)</sup>) において、ささやかな持ち物を持って衣料品店 (dukkān bazzāz) に座った。すると神は、ティムールのころに私から去っていった物の埋め合わせを、大いに恵んでくださった。

この2例の他にも、すでに見た、サイラーミー長老へのアネモネ水の献上の事例も、彼がカイロにおいては珍しい物品を扱うという商行為に従事していたことを伺わせる。以上より、アフマドが商売に携わっていたと推測できる<sup>(41)</sup>。

このような前提に立った時、アフマドにとっての知とは、直接的な利益には結びつかないにしても、間接的には彼の社会的な地位を高めるために役立っていたと言えるだろう。たとえば彼が行っていた、近隣の者を集めての説教集会は、彼が地域の名士 (a'yān) の1人として振る舞っていたことを示しており、そこでは彼の獲得したイスラーム的な知が文化資本として大きな役割を果たしていたことが容易に推測される。また、アフマドが人生のある期間においてカイロとダマスカスの間を頻繁に行き来していたという事実は、彼が交易活動に従事していたことを示しているばかりか、その交易活動と写本書写等の知的な活動とが分かちがたく結びついていたことも示している。アフマドにとっての地理的移動とは、生計を立てるための手段であったと同時に、知的実践の現れでもあり、彼の社会的な威信を高めるために欠かせない行為でもあったのである。

またこのようなアフマドのキャリアをマフムードとの比較で考えるならば、

(40) この市場の位置については Raymond & Wiet 1979: 112-113, 257 参照。

(41) 実際にウラマーの多くは、知的活動と並行して商行為を行うことが多かった。

佐藤 2004: 192参照。

両者は生まれ育った環境を共有しており、アフマドにもマフムードのような著名ウラマーとなるチャンスがあったはずだが、そうはならなかった。このことはアフマド自身の資質が劣っていたという理由のみで説明すべきではないだろう。ウラマーとして異例の出世を遂げた兄マフムードに対して、商業に従事したアフマドが、ある時は兄の困窮を経済的にバックアップし、またある時は歴史書の書写・要約などを行うことでサポートしていたとも考え得る。このようなアフマドのキャリアは、アイニー兄弟の家族戦略の現れとして見ることもできよう。

## 2 婚姻および家族構成について

アフマドの家族に関する情報は、兄マフムードおよび父や祖父の情報を除けばきわめて少ない。

たとえばアフマドによる記述の中で、彼の妻に関する情報が見られるのはわずか2箇所である。まずは796/1394年に、彼がアインターブの人々とともにメッカ巡礼を行った際、彼に同行した「我が家の家族 (ahl bayti)」として現れる女巡礼者 (al-ḥājjīyya), アフマドの娘アーイシャ ‘Ā’isha bint al-ḥājj Aḥmad b. al-Baṣrī なる人物がそれである [SU: 210a; SA: 149b]。

また、803/1400年のティムールによるアインターブ攻撃の際には、「私は家族と子供たちとともに彼らから逃げた。その際、肩に私の息子カーシムを、もう片方の肩には大きな小麦の袋を [担ぎ]、またカーシムの母 (umm Qāsim) はカーシムの兄弟イーサーを [担いだ]」[SA: 238a-b] とあるが、ここでの「カーシムの母」が上述のアーイシャであるかどうかは定かではない。

そして、アフマドの妻の名としては、上に見たワクフ設定文に現れるハリーム al-Ḥajja Ḥalīm bint al-Ḥājj Sulaymān もある。これらから、アフマドはその生涯に最低でも2人の女性を妻としており、またその名に冠される称号から、どちらもメッカ巡礼を経験していたことが分かる。また、この2人の父親それぞれにも「巡礼者 (al-ḥājj)」の称号が付されているが、「カーディー (al-qāḍī)」や「サドル (al-ṣadr)」などの称号は付されていない。ここからアフマドの舅となった者たちは、いずれも巡礼に行くほどの財力を持っていたが、

官職・役職は保持していない人物であったことがうかがえる。

アフマドの子供の情報としては、上記のカーシムについてはしばしば言及があり、詳細な死亡記事も残されている<sup>(42)</sup> [BN: 33b-34a; SA: 170a, 220b]。その死亡記事は次節で詳しく検討するが、その文中には、「彼の父にはもう10人子供がいたが、彼のように賢く、物知りで、寛大な者は現れなかった」とあり、アフマドには最低11人の子供がいたことがうかがえる。しかし彼らの具体的な情報については、上記のイーサーを含め、一切不明である。

### 3 息子カーシムについて

アフマドの息子カーシム Zayn al-Dīn Qāsim b. Aḥmad b. Aḥmad b. Mūsā al-ʿAyntābī は、796年5月10日/1394年3月13日生まれで、814年1月14日/1411年5月7日に没し、「アズハル・モスクのそばにある、彼の伯父（すなわちマフムード）が建てた学院に葬られた」[SA: 238a; BN: 94a-b]。生没年から計算すると、その享年は満17歳となる。若くして亡くなったカーシムも父アフマドと同様、いかなる官職・役職に就いていたことも確認出来ないが、アフマドがセリム・アー手稿本中に書き残した1頁分にわたる死亡記事には、カーシムが生前どのような学問分野を習得したかについて記す下りがある [SA: 238a-b]。以下にその内容を検討してみよう。

まずカーシムは、「アラビア語とトルコ語に通じ (faṣīḥ)」ており、「会計学と工学 (ʿilm al-ḥisāb wa'l-handasa)」「文字の学 (ʿilm al-ḥurūf)」「天文学 (ʿilm al-hay'āt wa'l-nujūm)」「暦と時間の学 (ʿilm al-miqāt wa'l-sā'āt)」「錬金術と文字魔術の学 (ʿilm al-kīmiyā' wa'l-ṭalismān)」「医学 (ʿilm al-ṭibb)」の諸学問に通じていたという。ここに列举されるのは、いわゆる「理性の諸学問<sup>(43)</sup>」に属する諸学問であり、このことからカーシムが、書記官僚として求められる実学的な

(42) アフマドによる死亡録以外にも、カーシムに関してはイブン・ハジャル、サハーウィーなどの同時代史料中にも死亡録が載せられているが、いずれもマフムード・アイニーの記述の引用であり、ここでみたアフマドの記した情報を超える部分はない [Inbā': 7/41; Daw': 6/178]。

(43) 「理性の諸学問」、およびそれと対置される「伝達の諸学問」については湯川 2009: 36, 58-62参照。

諸学問を修めていた様うかがえる。

その一方でカースィムは、伯父であるマフムードのもとで「クドゥーリーの書」<sup>(44)</sup>、Abū al-Layth al-Samarqandī の *al-Muqaddima*<sup>(45)</sup>、al-'Izzī の *al-Taṣrīf*<sup>(46)</sup> などを読んだ」という。これらの書名は法学やアラビア語学に関する書物であり、いわゆる「伝達の諸学問」に属する学問である点にも注目すべきであろう。ただし、カースィムは亡くなる前の2ヶ月半の間に「聖クルアーンの半分近くを暗唱した」とあり、つまりは17歳で没した時点ではクルアーンの暗誦を終えていないことが分かる。

以上、きわめて限られた情報ではあるが、アフマドの残した記述から分かるカースィムの経歴についてまとめるならば、以下のとおりである。まずクルアーン暗誦の遅さや師の数の少なさなどからは、正統的なウラマーとしての教育は不十分であったように見える。その点ではカースィムの経歴は、父アフマドと共通するものであった。しかし、その一方で「会計学や工学」など「理性の諸学問」の習得に比重が置かれていた様は、幅広い学問を修めようという志向とも受け取れるが、これらの学問は彼の父アフマドはほとんど学んだ形跡がない点は注目に値する。このような志向はむしろ、アインターブにおいて官僚として活躍した、アフマド自身の祖父や父と共通している<sup>(47)</sup>。カースィムの勉学の志向性は、カースィムの早世により実を結ぶことはなかったものの、父親であるアフマドの意図する家族戦略を反映したものと考えられる。実務官僚的な職を得ることがアイニー家の代々の「家業」であったとするならば<sup>(48)</sup>、アフマド自身はそのような職を志向しなかったものの、彼は息子にそのような教育を施すことによって家業を維持しようとしていたとも言えるのである。

(44) 前述の『提要 (*Mukhtaṣar*)』のこと。

(45) *Al-Muqaddima fī al-Ṣalāh*. 礼拝の義務に関する法学書。GAL: GI/196参照。

(46) 'Izz al-Dīn 'Abd al-Wahhāb al-Zanjānī, *Kitāb Taṣrīf al-Zanjānī*. 文法書。EI2: 12/841; GAL: GI/283 参照。

(47) アフマドの祖父、父のキャリアについては、注25)を参照。

(48) 家業という観点からすれば、アフマドの兄マフムードの息子 'Abd al-Raḥīm b. Maḥmūd がアフバース監督官 (*nāẓir al-aḥbās*) となり、その息子の Aḥmad b. 'Abd al-Raḥīm, Ibn al-'Aynī もまた財務官僚として要職にあったという事実は興味深い。それぞれの経歴については注25), および *Daw'*: 1/345 参照。

## お わ り に

本稿で検討したアフマド・アイニーのキャリアについてその特徴をまとめると、以下ようになる。

1. 知識の獲得については、アフマドは若い頃よりクルアーンの暗誦や法学およびタサウウフを中心とするイスラーム的学問を修め、それ以外にも兄マフムードの年代記を書写・要約することによって、歴史の知識を身につけていた。ただし、学修期間や師の数、および学んだテキストの内容では兄マフムードに大きく劣っていた。
2. 一方、彼は身につけた知識を近隣住民の前で「説教」という形で披露することがあった。また自らが執筆した手稿本をアズハル・モスクにワクフとして設定してもいた。しかし、これらの行為により収入を得ていたわけではなく、むしろ説教は近隣への食事の施しの場であり、ワクフの目的も著者たる自分に対してドゥアーを捧げることを求めるのみであった。役職・官職に就くことのほとんどなかったアフマドにとって、知識の行使が金銭的な利益に直接結びつくことはなかった。
3. しかし、商業に従事していたとおぼしいアフマドにとって、知識は実利に結びつかなくとも、彼が地域の名士として振る舞う際の社会的威信を高めるために役に立ったことであろう。さらに、そのような威信、商売により蓄えた財力、そして兄マフムードとの血縁関係を利用して、息子のカーシムの教育に意を用いていた。

このようなアフマドのキャリアから、彼をどのような存在としてとらえるべきであろうか。知識の獲得という点では、アフマドはまがりなりにもクルアーンの暗誦やその他のイスラーム的知識を習得しており、また行使という点では、多くの歴史書を伝写し、また地域住民の間では知識を有した名士と見なされていた<sup>(49)</sup>。しかし、獲得においてはクルアーン暗誦年齢の遅れに見られるような

(49) アフマドに付された“al-Ta'rikhi”とのニスバは、地域住民の間で歴史物語を説

学修内容の不完全さがあり、行使においては「手当付きの職」に就かなかったこと、ウラマー社会の中で認知されることがなかったことなどの特徴が見られる。それゆえアフマドを、従来のウラマー研究で扱われてきた一般的ウラマーの姿とは一致しない、ウラマーとしては劣った存在であったと見なすべきかも知れない。

確かにアフマドは、著名ウラマーを頂点とするウラマー社会からも、実務官僚のヒエラルキーからも排除された存在であった。アフマドはイスラーム的な知識を身につけながら、それを「手当付きの職」に還元することは決してなかった。しかし、アフマドにとっての知識とは、それを行使することにより地域社会における自らの威信を高めるものであり、同時に次世代への再生産に供する文化資本であった。もっぱら地域社会の中で知識を行使し民衆の世界と隣接して生きるアフマドのキャリアは、叙述史料に名前の残らない非エリートのウラマーがどのような生涯を送ったかを示す貴重な実例である。アフマドのライフコースをウラマー像の一典型として位置づけるならば、従来理解されてきた著名ウラマーを中心とするウラマー像は、見直される必要があるだろう。本稿で考察したのは1つの事例に過ぎないが、さらなる非著名ウラマーの事例を収集し比較検討することが、今後の課題である。

## 文献略称

『コーラン』：藤本勝次編，中央公論社，1979.

『大辞林』：第3版，三省堂，2006.

『大旅行記』：イブン・パットウータ『大旅行記』（イブン・ジュザイイ編，家島彦一訳注）平凡社，1996-2002.

BL: British Library, MS Add. 22366. (英国手稿本)

BN: Bibliothèque Nationale de France, MS Arabe 1544. (パリ手稿本)

*Ḍawʿ*: al-Sakhāwī, *al-Ḍawʿ al-Lamʿ li-Ahl al-Qarn al-Tasī*, 12 vols., Beirut, n.d.

*EI2*: *Encyclopaedia of Islam*, new edition, Leiden, 1960-2004.

*GAL*: Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur*, 5 vols., Leiden, 1891-1949.

*ʿIqd/Qarmūṭ*: al-ʿAynī, *ʿIqd al-Jumān fī Taʾrīkh Ahl al-Zamān*, ʿAbd al-Rāziq

教する彼への評価を反映したものとも考え得る。

- al-Ṭanṭāwī al-Qarmūṭ ed., 2 vols., Cairo, 1985-1989
- Inbā'*: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumar*, 9 vols., Hayderabad, 1967-76.
- Lexicon*: Lane, Edward, *Arabic-English Lexicon*, 1863-1893.
- Manhal*: Ibn Taghrībirdī, *al-Manhal al-Ṣāfi wa'l-Mustawfā ba'd al-Wāfi*, 12 vols., Cairo, 1985-2006.
- Nujūm*: Ibid., *al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa'l-Qāhira*, 16 vols., Cairo, n.d.
- SA: Selim Ağa Kütüphanesi, MS Selim Ağa 837. (セリム・アー手稿本)
- Shihābī*: Ahmad al-'Aynī, *Al-Ta'rikh al-Shihābī wa'l-Qamar al-Munir fī Awṣāf Ahl al-'Aṣr wa'l-Zamān*, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, MS Ahmet III 2952/2.
- SU: Süleymaniye Kütüphanesi, MS Süleymaniye 830. (スレイマニエ手稿本)
- Supplément*: Dozy, R., *Supplément aux dictionnaires arabes*, 2 vols., Beirut, 1881.

## 参考文献

- 五十嵐大介 2010:「中世エジプトの寄進文書」『アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教』(研究叢書50) 中央大学出版部, 199-242.
- 岩武昭男 1995:「ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書」『アジアの文化と社会: 関西学院大学東洋史学専修開設30周年記念論集』法律文化社, 277-310.
- 岡崎敦 2008:「写本 (ヨーロッパの)」『歴史学事典15 コミュニケーション』弘文堂, 295-298.
- 近藤眞美 1999:「マムルーク朝におけるウラマーの家系の隆盛: スプキー家の場合」『オリエント』42: 1, 84-102.
- 佐藤次高 2004:『イスラームの国家と王権』岩波書店
- 2008:「写本 (イスラムの)」『歴史学事典15 コミュニケーション』弘文堂, 293-295.
- 谷口淳一 2011:『聖なる学問, 俗なる人生: 中世のイスラーム学者』(イスラームを知る2) 山川出版社.
- 塚田絵里奈 2009:「後期マムルーク朝社会におけるワーイズの実像: 人気説教師クドゥスィーの場合」『西南アジア研究』71, 28-43.
- 築島裕 1986:「写本」『国史大辞典』吉川弘文館, vol. 7, 229-230
- 苗村卓哉 2010:「15~16世紀東アラブ世界におけるアルド: イブン・トゥールーンの自伝・名士伝記集を中心に」『オリエント』53: 1, 31-57.
- 中町信孝 2004:「パフリー・マムルーク朝時代史料としてのアイニーの年代記」『オリエント』46: 2, 134-160.
- 2005:「アイニーの2年代記の執筆手順とその史料的价值: 『イクド・アル＝ジュマーン』第17巻前半部の出典分析」『東洋学報』86: 4, 031-063.
- 2006:「アイニーに帰せられた4年代記の成立年代と執筆意図」『西南アジ

- ア研究』65, 41-55.
- 2009: 「バドルッディーン・アイニーの学問的キャリア」『甲南大学紀要』文学編159, 51-71.
- 三浦徹 1995: 「ウラマー」『イスラーム研究ハンドブック』（三浦徹, 東長靖, 黒木英充編, 講座イスラーム世界別巻）栄光教育文化研究所, 249-256.
- 湯川武 2009: 『イスラーム社会の知の伝達』（世界史リブレット102）山川出版社.
- Amīn, Muḥammad Muḥammad 1980: *Al-Awqāf wa'l-Ḥayāh al-Ijtimā'ī fī Miṣr 648-923H/1250-1518M: Dirāsa Ta'rikhiyya Wathā'iqiyya*, Cairo: Dār al-Nahḍa al-'Arabiyya bi'l-Qāhira.
- Cahen, Claude 1936: "Les chroniques arabes concernant la Syrie, l'Égypte et la Mésopotamie: de la conquête arabe à la conquête ottomane dans les bibliothèques d'Istanbul," *Revue des études islamiques* 10, 333-362.
- Chamberlain, Michael 1994: *Knowledge and Social Practice in Medieval Damascus, 1190-1350*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Darrāḡ, Ahmed 1963: *L'acte de waqf de Barsbay (Huḡḡat waqf Barsbay)*, Cairo: Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Humphreys, R. Stephen 1991: *Islamic History: a Framework for Inquiry*, Princeton: Princeton University Press.
- Karatay, Fehmi Edhem 1966: *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Arapça Yazmalar Kataloğu*, vol. 3, Istanbul.
- Marín, Manuela 2010: "The 'ulamā'," *The New Cambridge History of Islam*, M. A. Cook ed., vol. 2, Cambridge: Cambridge University Press, 679-704.
- Quatremère, M. 1837-45: *Histoire des sultans mamlouks de l'Égypte*, Paris.
- Raymond, André & Gaston Wiet 1979: *Les Marchés du Caire: Traduction annotée du texte de Maqrīzī*, Cairo: Institut français d'archéologie orientale du Caire.
- Sayyid, Ayman Fu'ād 1997: *Al-Kitāb al-'Arabī al-Makhṭūṭ wa-'Ilm al-Makhṭūṭāt*, 2 vols., Cairo: al-Dār al-Miṣriyya al-Lubnāniyya.
- Shoshan, Boaz 1993: *Popular Culture in Medieval Cairo*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Slane, M. de 1883: *Catalogue des manuscrits arabes de la Bibliothèque Nationale*, Paris.
- Warner, Nicholas, 2005: *The Monuments of Historic Cairo: A Map and Descriptive Catalogue*, Cairo: The American University in Cairo Press.

recorded as lasting either 12 years from 735 or 14 years from 733, and I was able to clarify that the present-day scholars who have accepted these dates have depicted a mistaken portrait of the final period of the Chaghatay khānate.

**THE LIFE OF A LITTLE-KNOWN INTELLECTUAL  
OF THE MAMLUK PERIOD: THE CASE  
STUDY OF AḤMAD AL-‘AYNĪ**

NAKAMACHI Nobutaka

Shihāb al-Dīn Aḥmad al-‘Aynī (1363- at least 1431) does not appear in any contemporary written sources and was nearly anonymous in the ‘*ulamā*’ society of his day, but as he was the younger brother of the famous historian Badr al-Dīn Maḥmūd al-‘Aynī (1361-1451), several manuscripts of works that were either copied or authored by Aḥmad are extant, and from the fragmentary records found therein, the course of his life can be reconstructed.

This article analyzes Aḥmad’s life in terms of the following three points: his obtaining of knowledge, exercise of that knowledge, and the reproduction of that knowledge. First, as regards obtaining knowledge Aḥmad was much inferior to his elder brother Maḥmūd in terms of the length of his studies, the number of teachers, and the contents of the texts he studied, but he was a master of recitation of the Quran and Islamic scholarship; jurisprudence, *taṣawwuf* and so on. And, as regards the exercise of knowledge, Aḥmad preached to his neighbors and donated his books to the Azhar Mosque, but these acts did not directly lead to obtaining a stipendiary post or monetary profit. In regard to the reproduction of knowledge, it can be pointed out that for Aḥmad, who actually appears to have engaged in commerce, knowledge was not for material gain but rather an aid in enhancing social prestige or providing an education to his son Qāsim as a pragmatic bureaucrat.

When Aḥmad’s career viewed in this light, he can be seen as of little significance in ‘*ulamā*’ society, but this should not be linked simply to any flaw in his character as an individual. Although he was excluded from both ‘*ulamā*’ society and the bureaucratic hierarchy, he maintained prestige in local society, and the life course of Aḥmad, who upheld knowledge that would be conveyed to the next gen-

eration for reproduction, can provide a viewpoint of an overlooked figured in the study of '*ulamā*' society, which have tended to deal only with the famed members of '*ulamā*' society.